



Title	ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本 (E.Pałasz-Rutkowska, “ Poland and Japan during the Lifetime of B.Piłsudski. ”)
Author(s)	パワシュ＝ルトコフスカ, エヴァ
Citation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53487
Type	proceedings
Note	ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力：駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
File Information	01Rutkowska.pdf



[Instructions for use](#)

ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ

ただいまご紹介にあずかりましたワルシャワ大学日本学科のエヴァ・パワシュ＝ルトコフスカでございます。この度、ブロニスワフ・ピウスツキ像の除幕式とその関連のイベントにお招きくださった駐日ポーランド共和国大使ツイリル・コザチェフスキ閣下と、また今日の「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事」と題する国際セミナーで講演の機会を与えてくださった北海道大学名誉教授の井上紘一先生に心からお礼を申し上げます。

私自身は、本日のイベントの主人公である、アイヌの言語やフォークロアの研究において多大な貢献をなした民族学者のブロニスワフ・ピウスツキの専門家ではないので、彼の一生と活動の背景となったポーランド・日本関係、すなわち表題にありますように「ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本」について講演させていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

ご存知の通り、ピウスツキはロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座して懲役15年の刑を言い渡され、1887年に樺太(サハリン)へ流されました。当時はまだポーランド・日本間の正式な外交関係が樹立されていませんでした。ポーランドは、1795年のロシア、プロシア(ドイツ)、オーストリアによる第三次分割から1919年、第一次世界大戦終了まで独立国家として存在しなかったからです。一方、日本は17世紀後半以降、270年にわたり鎖国状況にあり、国外との関係はほとんどありませんでした。しかし19世紀後半に開国して以来、徐々にポーランド人と日本人の非公式な接触が始まり、限られた範囲でしたが、情報も得られるようになりましたが、おそらく19世紀後半まで両国の一般国民は、お互いの国を意識するこ

とはなかつただろうと思います。

ポーランド人が初めて「日本」の名を聞き知ったのは、おそらくマルコ・ポーロの『東方見聞録(*Il Millione*)』の15世紀に出たラテン語訳を通じてであろうと思われます(ここでは中国名に由来するジパンゴもしくはジパングと呼ばれていた)。ポーランド語の文献で初めて日本に触れているのは、1579年に初版が出て以来幾度も増補されて版を重ねたピョートル・スカルガ＝パヴェンスキの『聖人伝』です。スカルガはイエズス会士として極東での布教活動に大きな関心を持ち、『聖人伝』には、1549年にカトリック宣教師として初めて日本に渡ったイエズス会士フランシスコ・ザヴィエルの生涯について書いています。続く数十年の間、日本について書き残したのは主にイエズス会士たちでしたが、それはもっぱら自らの修道士としての使命と関連した内容でした。徳川幕府の禁教令によってキリスト教が禁止された結果、信徒の迫害や処刑が始まり、それで1643年に殉教したのが、日本にわたった最初のポーランド人であるイエズス会士ヴォイチェフ・メンチンスキでした。この事実は、ポーランドに大きな反響を呼び起こし、数年後クラクフで出版された彼の伝記の中に描かれています。

その後、宗教関係以外でもいくつかポーランド語の記述が現われ、例えば、1797年に出版されたマウリツィ・アウグスト・ベニョフスキは旅行記の中で日本のことに触れています。信頼に足る極東旅行の記録として日本に関する情報がもたらされるのは19世紀になってからです。ロシア人船長ヴァシリー・ゴロヴニンの『日本幽囚記』のポーランド語訳が1823年に出版されました。ゴロヴニンは1811年に千島列島と北海道(蝦夷地)海域に探検に出た際、当時鎖国

を守り続けていた日本人に捕捉されて、そのときのことを書いたのです。

19世紀後半になって日本が開国すると、他のヨーロッパ諸国の探検家を書いた旅行記の翻訳とか、ポーランド人研究者、旅行者の日記・回顧録とかが出版されました。それ以来一般のポーランド人が日本という国をより認識するようになりました。特に、私の興味を引くのはカロール・ランツコロンスキとパヴェウ・サピェハの日本についての思い出です。二人とも、別々に極東へ行き、明治憲法が發布された1889年頃の日本を印象深く書き記しています。また、主に流刑地であるシベリアを経て日本まで行き着いたポーランド人学者がいました。それは例えばルヴフ大学の動物学教授シモン・スィルスキであり、南洋諸島を研究した民族学者ヤン・クバリでした。

19世紀末には日本文学の重訳が初めて現われました。1896年に出版された為永春水の『いろは文庫』がその始めで、それらはおおむね日本芸術に関するもので、ヨーロッパにおけるジャポニズムの流行ともあいまって「若きポーランド(Młoda Polska)」の芸術家たちに大きな影響を与えました。この点では、日本美術の愛好家であり、収集家でもあるフェリクス・ヤシェンスキの数千点に上る木版画を中心としたコレクションが特に有名です。このユニークなコレクションは20世紀初めにクラクフの国立博物館に寄贈され、1994年にアンジェイ・ワイダ監督の主導で建設された「マンガ日本美術・技術博物館」に常設展示の場を得ました。

日本人が「ポーランド」の名を初めて耳にしたのは、おそらくローマへ派遣された4名の少年いわゆる天正遣欧少年使節の時(1582-1590)でしょう。彼らは1585年にヴァチカンでローマ教皇グレゴリウス十三世に謁見したとき、ポーランド国王からの派遣者ベルナルド・マチェヨフスキと会ったと思われます。

次にポーランドとその都市についての情報が1622年に長崎で発行されたイエズス会士マテオ・リッチの世界地理の本に現われました。宣教師たちのおかげで、日本人がコペルニクスとその学説を知ったようです。1714年および1725年には、儒学者で歴史学者の新井白石がヨ

ーロッパに関する『西洋紀聞』という著作を発表し、投獄されていたイタリア人宣教師ヤン・バプテスト・シドッティから得た情報に基づいてポーランドについても言及しています。

日本では、19世紀後半初めに開国して以来、欧米諸国の文物研究に始まる急激な近代化が始まりました。その過程のなかで日本人はポーランドという国やその歴史などにも興味をいだきはじめました。一般の日本人がはじめてポーランドの名前に接したのはおそらく福沢諭吉の『西洋事情』を通じてであっただろうと思われま

す。その頃、日本人は欧米諸国から得た資料を基に、かれらが犯した間違いを繰り返さないような政策を採るべく熟慮しました。それを目的に、例えば、東海散士は1885年に『佳人之奇遇』を著しましたが、そのなかで初めてポーランド民族の悲劇、すなわち国土分割や独立運動について記しています。著者は長年にわたり抑圧されてきたポーランド民族への連帯感を強調しながらも、日本が世界の国々との付き合いをはじめるとに当たって、強大国等の植民地化政策に対する警告を発していたのでした。

同様の主旨で、詩人の落合直文は後年、軍歌としてポピュラーになった『波蘭懷古』の詩を著しました。

落合直文がこの詩を書くについては、ベルリンからウラジオストックまで、ポーランドの地を経てシベリア横断単騎旅行(1892-1893)を実行した福島安正少佐の回顧録と報告書が機縁となっていました。日・ポ関係の上で大事な人物ですから少し細かく紹介させていただきます。

彼が1887年に在ベルリン日本公使館付武官に任命された目的は、ヨーロッパの近代的軍隊とその戦略に関する情報を収集することでした。日本が200年あまりの鎖国を終えて急速に近代化へ乗り出した当時の日本政府の主な目的の一つは、西欧型の強力な近代的軍隊を創設することでした。日本政府はそのような軍隊のみが日本の安全と主権を保障すると考えていたからです。国家の全体的な戦略計画を立てるためには、他の国々、とりわけもっとも強大で危険な隣国であるロシアの戦略に関する情報が不可欠だったのです。

福島は、5年間にわたるベルリン滞在中、日本軍の近代化のモデルとなったプロイセン軍についての詳細な知識を得ただけなく、イギリス、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、オランダ、ベルギー、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、スイス、ロシア(欧州部)、バルカン諸国など、ヨーロッパの大半の国々を訪れました。

ドイツ滞在中には分割支配下にあったポーランドを数度にわたって訪れ、何人ものポーランド人と接触したようです。というのも彼は、いわゆるポーランド志士(愛国者)、すなわち武力闘争によるポーランドの独立を目指す熱烈な反ロシア派のみが、ロシア全体に関するもっとも重要な情報をもたらしてくれると考えていたからです。彼はそうした情報を日本陸軍参謀本部へ伝えるとともに、それをもとに自ら大掛かりな単独旅行に出るという計画を立てました。情報提供者たちから聞いていたことを自分の目で確かめようとしたのです。戦略的観点からもっとも彼の関心を引いたのは、当時建設中だったシベリア横断鉄道でした。ポーランド人の中には流刑を経験し、シベリアに関する情報を提供するだけでなく、今なおそこに留まっているポーランド人と福島との接触を手助けできた者もいたようです。

要するに、福島少佐の単騎旅行の主目的はヨーロッパ諸国の近代的軍備状況の調査、それも特に軍事大国であり日本にとって最も危険な隣国ロシアの探査でした。福島少佐は日本権力当局者の代表として、長く対ロシア抵抗運動に携わったポーランド人たちと初めて接触をもった軍人で、彼らから大国ロシアについての詳しい情報を得ることができました。

福島は、1892年2月11日、紀元節の日に、ベルリンを出発し、三日目に以前ポーランド・ドイツの国境の町であったコシュチシンに着きました。2月15日に、当時ロシアとの国境沿いにあったポズナンに至り、ロシア領に入りました。コニン、コウォ、クトノ、ウォーヴィチを通過し、24日にワルシャワに到着しました。福島によれば、ワルシャワは整然とした、しかし騒々しく活気にあふれたかつての自由ポーランドの都でした。彼にとりわけ深い印象を与

えたのは、かつてのポーランド王国の栄華とポーランド文化の水準の高さを物語る王宮でした。そればかりではなく、分割強国に対する幾度にもわたる蜂起に際してこの町が味わった無数の悲劇の痕跡も、彼は目のあたりにしたのです。

ロシア中央部、特にシベリア横断の計画に際し、今度も福島はポーランド人の独立運動家やシベリア流刑の経験者と会っていたようです。実はこれについて証拠も具体的な記述も何もないのですが、「ポーランド志士」たちというメモが残っていることから、おそらく事実とみてよいでしょう。彼は、ポーランド独立を宿願とするポーランド人の秘密政治組織が存在することを知っていました。そうした組織の本部——支部も同様ですが——は資金や武器や装備などを安全に集められるという理由から、大半がポーランド国外のイギリス、フランス、ドイツといった国々に置かれていました。これらの組織の活動家たちは大概その国の諜報機関と協力関係にあり、その関係をポーランド独立の実現に役立てようとしていました。そして、国際舞台における諜報活動を開始したばかりの日本の参謀本部の諜報員が、とりわけロシア情報を豊富に持つこれら組織の人々に助言や助力を求めるといことはおおいにありうることでした。ロシアの重要拠点調査とポーランド人との接触は、福島にとりロシア領内の旅行ルートを決定する際にきわめて重要な要素でした。彼はおそらくポーランドの独立運動家たちから指定された場所に赴き、その仲間と接触して東京の参謀本部から要求された探索情報を得たものと思われます。

28日にワルシャワを出発し、オストロウエンカ、シチュチン、アウグストゥフとスヴァウキを通過して3月7日にカウナス(コヴノ)に着きました。その後、ウラル、シベリア、モンゴル、満州を経由して1893年6月12日にウラジオストックに到着しました。そこから船で日本に帰着すると、彼は英雄にまつり上げられ、東京をはじめ行く先々で熱狂的な歓迎を受けました。参謀本部は福島の情報収集能力とその分野における豊富な知識を高く評価し、1899年に参謀本部第二部長に任命しました。以後日本陸軍諜

報組織の責任者の一人になったわけです。1904年に日露戦争が勃発すると、大本営参謀に就任、満州軍総司令部参謀としてそれまでの経験と情報を活かして手腕を振るいました。ヨーロッパでの任務期とシベリア横断単騎旅行の際に福島が得た情報は日露戦争中大いに活用されました。

日露戦争が始まる前、ブロニスワフ・ピウスツキはニコライ二世の戴冠に際する大赦で、15年の刑から10年に減刑されたため、1897年には刑期が満了となりました。その後、1899年にウラジオストックへ渡り、博物館につとめました。1902年から1905年にかけて、ロシア帝国科学アカデミーの正式派遣で再びサハリンへ渡航し、アイヌとオロッコの調査を行いました。その時の彼の研究は、いろいろな分野に関する研究の土台になったため特に意味があったといえます。1902年にピウスツキは初めて日本の函館に行きましたが、旅行途中で研究をするつもりはありませんでした。翌年、再び渡日し、ロシア帝室地理協会がポーランド人民族学者ヴァツワフ・シェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に同行して、函館、白老、平取、札幌などを巡歴しました。

シェロシェフスキは帰国の途次、東京、京都、神戸、大阪等を訪れ、そこで集めた資料を使って、のちに日本をテーマとする文学作品を書いたり講演を行ったりしました。その中に、アイヌ調査に関する *Wśród kosmatych ludzi* (毛深い人たちの間で) という著書(本書 p.77~)もあります。

1904年2月10日に日露戦争が勃発したというニュースは、ポーランドでは初め半信半疑に受け止められました。なぜなら、強大なロシアとの戦争とあっては、ようやく国際舞台へ登場したばかりの小国にすぎない日本という国にはとうてい勝機はない、と思われたからです。しかし、それからまもなく、緒戦における日本軍勝利の報が伝わると、この戦争に対するポーランド人の態度が一変しました。昔からポーランドの敵である大国ロシアと戦っている日本への支持が広まり、深い親近感をいだくようになりました。その頃日本を扱ったポーランド文学、日本文学の重訳、日本をテーマとする他の出版物が急増しました。

ポーランドの一部の政治勢力の代表者・民族解放運動の指導者たちは、日露戦争の結果ロシアは弱体化し、それによってポーランドへの態度を変えるのではないかと考えていました。そして、この戦争をポーランド問題、特に1795年の第三次分割によって失った独立の回復のために利用しようと試みていました。そして日本側、特に軍部にとっては、ポーランド人のロシア軍情報、あるいは彼らの武装蜂起やシベリア横断鉄道網の攪乱工作はロシア軍の弱体化につながるという大きなメリットがありました。

特に日露戦争をポーランド問題の解決に利用しようとしたのが、ポーランド社会党(*Polska Partia Socjalistyczna*)と国民連盟(*Liga Narodowa*)でした。しかし両党の立場が全く異なっていたので、日本側との接触、折衝は密かに別々に行われました。

ブロニスワフの弟であるユゼフ・ピウスツキを長とするポーランド社会党の活動家たちは、日露戦争をポーランド国家の独立回復に役立たせるべきだと考えていました。また、日本からの資金援助はポーランド王国内における対ロシア武装蜂起組織にとって大きな助けになると考えていました。蜂起により欧州地域におけるロシア軍は増強を強いられ、それが極東地域におけるロシア軍の弱体化につながると考えました。シベリア鉄道職員のなかには多くのポーランド人が働いていたため、ロシア兵の輸送手段となるシベリア鉄道や満州地域前線における設備などへの破壊工作も提案され、また、ポーランド人兵士のなかにひそかに革命文書を頒布し、兵士たちの脱走をうながす工作も考えられました。これらすべての活動は日本の敵ロシアの弱体化を促すはずでした。

国民連盟とその主導者であるロマン・ドモフスキは全く異なる立場をとっていました。かれらは、ポーランド王国内の蜂起は再度ポーランド人に悲劇をもたらし、日本にはなんの利益ももたらさないと主張しました。ロシア当局はポーランド人の武装蜂起をまたたくまに鎮圧し、従来にも増して極東の兵力を増強するにちがいないと訴えました。日本当局にこうした危惧を訴えるためにドモフスキは東京に赴き、1904年5月15日から7月22日まで滞在してしまし

た。攪乱工作などを提案するピウスツキは7月10日に渡日し、7月30日に日本を離れました。1918年のポーランド独立に際して活躍する両雄は、日本の外務省と陸軍参謀本部の代表者と話し合い、両者共々日本との協力提案や現状に関する意見を添えた文書を提出しました。ドモフスキは離日直前の7月20日、ピウスツキには内密に、ポーランドの地で革命的行動をおこすことに危惧するとの内容の書簡を外務省に提出しました(*To His Excellency the Minister for Foreign Affairs in Tokyo* [在東京外務大臣閣下]、外務省外交史料館、東京)。その書簡にはロシア当局がすばやくポーランドの反乱を鎮圧し、おおくの血が流れると記述してあり、またポーランドにおけるあらゆる騒乱や、極東の地での敗北の代償を求めるであろうロシアの要求は、日本にとって不利になると強調していました。

ピウスツキの日本での任務は不成功に終わりました。日本側は主に軍事情報の収集やシベリア横断鉄道の破壊工作に興味があり、ポーランドの政治的側面には興味を示しませんでした。世界の政治・外交舞台にやっと参入したばかりの日本は欧州問題に巻き込まれることを好まず、更には1902年以来同盟を結んでいる英国の目を気にして対外干渉を控えていました。日本当局の決定にドモフスキからの影響があったことは否めません。戦争に関してピウスツキとドモフスキの見解は正反対でしたが、日本軍の捕虜になったポーランド人戦時捕虜の運命については二人とも気遣っていました(『日本におけるポーランド人墓碑の探索』ポーランド文化・民族遺産省、2010を参照)。

日露戦争時のポーランド・日本共同工作は当初、想定していたほどの成果はあがりませんでした。まさにこの時、ポーランド国民の中に日本人への深い親近感が誕生したのです。

ユゼフ・ピウスツキは後年、日本軍の功績をたたえて、51名の司令官に戦時功労勲章(*Order Virtuti Militari*)を授与しました。ドモフスキは自らの著作のなかで、日本民族の資質に触れ、日本人の道徳的価値観や集団主義社会を積極的に評価しました。

1905年9月5日に調印されたポーツマス講和条約によって日露戦争が終了しました。この条

約により南樺太が日本へ割譲されました。そしてブロニスワフ・ピウスツキは南樺太のアイという村に住む家族と対面しましたが、ポーランドへ連れて帰ることは不可能なことを知りました。同年10月にブロニスワフは神戸も訪れました。同年12月から翌年の8月にかけて再び来日して、社会的な影響力を持つ政治家や下層民の権利のために闘った人物(横山源之助)、代表的な婦人解放運動家、多くの左翼活動家たちと知り合ったのです。なかでももっとも親交を深めたのは、ロシア文学者であり翻訳家としても知られ、のちにポーランド文学の翻訳にも携わった二葉亭四迷でした。ブロニスワフ・ピウスツキは1906年8月3日に日本を去り、アメリカ、イギリス、フランスを経由して、その年の秋帰国しました。1914年8月に第一次世界大戦が勃発すると間もなくブロニスワフ・ピウスツキはウィーンへ脱出して、そのあとスイスへ行き、1917年11月にパリに到着しました。そして弟のユゼフの政敵だったドモフスキが組織した「ポーランド国民委員会」のパリ事務所勤務しました。翌年の5月にこの優秀な民族学者は急死しました。

1918年11月11日に第一次世界大戦が終了しました。同月16日、その当時ポーランド軍総司令官だったユゼフ・ピウスツキ将軍は連合諸国政府に、独立ポーランド国家の成立を通知しました。翌日、ポーランド共和国政府は、イギリス、フランス、日本、イタリア、アメリカの各政府に国交締結を求める覚書を送りました。日本政府がようやくポーランド独立の承認に踏み切ったのは、1919年3月6日のことで、ポーランド側に正式に知らせたのは3月22日付となっています。そのためポーランド側の史料では、ポーランド独立の日本による法的承認は3月22日付となっています。

日本とポーランドが正式な関係を樹立するための次なるステップは、外交使節の交換でした。1919年3月に、日本外務省は中東欧新興諸国への外交代表の派遣に関する文書を作成しました。この文書は、ソ連情勢に関する有用な情報を得るために、ヘルシンキ、キエフ、オデッサに総領事館をおく必要があることを勧告していました。さらに、五大国の一員としては

ぜひ中東欧諸国にも外交使節をおくべきであるとの見地から、ポーランドとチェコスロヴァキアの名も挙げられています。しかし、適当な人材がいなかったため、この案は実現しませんでした。

日本においては文民当局より軍当局の方がポーランドに強い関心をしめしていました。この事実は、在ポーランド日本公使館が開設される以前、1919年からワルシャワにおいて活動していた後の大将、山脇正隆大尉の業績といえるでしょう。参謀本部が山脇大尉をヨーロッパに派遣する際に、ロシアより西の国への赴任を自由に選ばせましたが、大尉はポーランドを選び、その理由として三つあげました。

第一に、ポーランドは当時日本社会のなかでまことに人気のある国でした。第二に、[...]ポーランド人は「背骨のまっすぐな」、つまりまっ正直な人間でした。最後に、長期にわたる抑圧や分割国による民族性撲滅政策にもかかわらず、自己の言語や文化を護りぬいたが、これは教育や家族の有り方が規準にかなっているが故です。こどもたちは日本と同じように、両親を敬い傾聴します。

出発前、私はそれ以前の日本とポーランドの関係については全然知りませんでした。最初にパリに行き、そこで初めて出会った人物の一人が、ポーランド代表を率いてパリ講和会議に来ていたイグナツィ・パデレフスキだったのです。パリでは、ドモフスキとも知り合いになりました。[...]。私はポーランド行きの招待状と許可証をもらい、[...]ポーランドに着いたのは1919年6月のことでした。当時、ピウスツキは国家元首でした。私はほどなく彼と会う機会に恵まれ、私たちは最初の出会いから親密な打ち解けた間柄になりました。[...]

この時期の日本はポーランドに対して非常に好意的でした。日本人の親ポーランド感情のきっかけの一つは、滅ぼされたポーランドの悲しい運命をうたったある軍

歌でした。19世紀末の福島少佐の単独騎馬旅行の印象をもとに書かれたものです。

当時のポーランドにとって、日本の友好的な態度は非常に重要だったのではないのでしょうか。日本は五大国の一つで、パリでは日本の発言が大きな影響力をもっていたからです。

日本が最初の正式な外交使節をポーランドへ派遣することを最終的に決定したのは、1921年5月のことでした。初代の駐ポーランド公使に就任したのは、1904年にドモフスキとユゼフ・ピウスツキが東京で日本当局と会談した際に通訳を務めた川上俊彦でした。同時に山脇は正式な駐ポーランド日本公使館付き武官に就任しました。これ以降、彼は戦間期を通してポ・日関係に重要な役割をはたしました。

ポーランド側は日本よりはるかに、外交関係の早期締結と正式の外交使節の派遣に熱心でした。それは最初の駐日代理公使にユゼフ・タルゴフスキが1920年4月7日に任命され、8月10日に東京に着任したことからもわかります。

第一次世界大戦後、ポーランドは国の独立を回復し、1920年代は新興国家として安定した国境線確立とヨーロッパ大陸内での地位強化に専念していました。ポーランドにとって日本との友好関係を維持することは、東側隣国との難しい関係上、適正なバランスをとることになりました。一方、日本は1920年代に世界の諸問題を決定する国際連盟の主要国の一つとして大国の道を歩みはじめました。国際協調ということ学びはじめ、極東地域での国益維持に気を配る日本は、自国に直接関連しない事項には介入せず、他の大国との対決姿勢を避けるようにつとめました。しかしながら、ポーランドに関してはおおむね友好的な中立的姿勢をしめました。

日本では19世紀末に、ポーランドではその十数年後に生まれた、相互の親近感や戦間期のポ・日関係を支配し、こうした感情は公的関係にも影響をあたえ、今日まで続いていると思います。今回のイベントはその証拠の一つだろうと考えます。

* Author & title: E.Pałasz-Rutkowska, "Poland and Japan during the Lifetime of B.Piłsudski."